

長崎とバドミントン

大東 良平

近代スポーツ競技として長崎のバドミンントンの歴史は、昭和24年開催の東京国体前、2回の準備委員会(幹事長松浦信義氏)を経て長崎県バドミントン協会が設立されたことから始まる。東京国体へは、オープン競技として長崎県からも参加している。

大会開催の経緯は分からないが、昭和29年勝山小学校と新興善小学校の講堂に於いて開催された、第3回全日本実業団バドミントン選手権大会の開催話を長崎市役所の先輩から教えてもらった。当時の会場は、体育館と言えるものでなく、バドミントン3面分の広さ、低い天井の講堂で、とても全国大会ができる施設ではなかったのが驚いた。優勝は、男子が富山県十条製紙伏木工場、女子が愛知県トヨタ自動車で第1回から第3回まで両チームとも団体3連覇している。24チーム参加の男子団体では、三菱長崎造船所が3位決定戦で勝利した。第65回目となる今でも第3回大会の成績が最高の戦績であるが、65回連続出場は、素晴らしい。

昭和29年は、九州バドミントン連盟が長崎県に設立され、第一回全九州総合大会を県立短期大学で開催している。



出島「バドミントン伝来之地」碑

バドミントンが長崎に広まったのは、ABC(原爆傷害調査委員会)部長のジェリー・ムーリン氏や南極観測船「宗谷」を建造した川南造船所(香焼町)の男女バドミントン部も貢献している。新中川町ABC大ホールと三菱会館(出島町長崎税関隣り)横モータープールでの練習などで、ムーリン氏が在任11か月の間にかなり普及したと思われる。

昭和25年2月ムーリン氏

中山紀子女史を始め、亡くなられた湯木博恵(新沼博江)女史の日本女子チームは、長崎県男子国体選手の三菱長崎造船所、教員、瓊浦高校生相手に互角以上の勝負をされていた。第4回から第6回までのユーバー杯大会直前合宿は、いずれも長崎駒場町競輪場跡地(旧大橋球場)裏に建設された長崎国際体育館で行われた。

国際体育館で、長崎県バドミントン協会創立30周年記念事業として行われたワールドカップ'79(昭和54年)長崎大会は、英国やオランダの選手ほかインドネシア(国技バドミントン)の世界チャンピオン、リム・スイキンなど有名な選手が訪れ、観客も超満員でかなり盛り上ったようだ。又、以前にはデンマークのコプス選手も訪れている。

ユーバー杯第5回東京大会(昭和44年)は、長崎国体開催年であり、瓊浦高校2年生大東歳文、佐藤彰が活躍していた。日体大男子バドミントン部監督大東忠司氏は、大東歳文氏の長男でバルセロナ、北京と2大会連続オリンピックへ出場、北京大会では男子複で5位入賞を果たしている。指導者としては、瓊浦高校出身で日体大バドミントン部総監督、日本U-13コーチ石場隆雄(八王子市在住)も忘れられない存在だ。

長崎がバドミントンと縁が深い話は、もうひとつある。昭和47年日中国交正常化の翌年昭和48年9月、第1回日中バドミントン長崎大会を長崎市民体育館の柿落としとして開催した。日本と中国チーム(陳玉娘選手一行13人)の女子団体戦で、長崎県代表で岡野彰子(旧姓柿本)女史と尾崎省子(旧姓樋口)女史が日本チームに加わった試合は、世界トップ同士の間で白熱し、複で柿本・樋口組も善戦した。

昭和44年以来45年ぶりの国体(第69回)が一昨年、長崎市民体育館で台風の最中開催された。少年男子・成年女子は一回戦敗退、成年男子3回戦敗退、少年女子はベスト8入賞後、準々決勝で敗退し、5位。昨年和歌山国体では、残念ながらも入賞できなかったが、今年、少年女子を除く、少年男子と成年男女の選手・監督が一丸となって、九州ブロック予選会を勝ち抜き、国体開催地の岩手県北上市で頑張つてほしい。

昨年、全国定時制通信制選手権大会では、佐世保中央高校が男子団体と個人男子単で同校住徳聖也選手が、2年連続優勝した。又2月に長崎県スポーツ賞を団体個人ともに受賞しており、日頃の努力に敬意を称したい。

小学生では、村本里奈・松山陽香組(時津小)が九州予選会優勝後、全国小学生選手権大会小学4年生の部で女子複準優勝、同部で川本諒太(矢

東京転任の直前、同氏寄贈の優勝杯を争奪する「ムーリン杯争奪第1回大会」は、県バドミントン協会・長崎日々新聞社共催によりABC大ホールで開催。男子7チーム、女子6チームが参加、男子はABC、女子は長崎東高校が優勝している。現在は、長崎市民体育館で行われている。ムーリン杯争奪大会が毎年4月、長崎市民体育館で行われている。バドミントン競技としての始まりは、19世紀中頃、英国ポーフォート公爵家のバドミントンハウスの大広間で遊んでいた羽根突きが、ネットを張りルールを設け、その後1893年(明治26)英国で協会が設立され、近代スポーツ競技のひとつとして世界に広まっている。

長崎からバドミントンが急速に広まったという説がある。それは元長崎県バドミントン協会事務局長片平直昭氏が、懸命に普及を行ったことをバドミントン専門誌が紹介していることや、長崎歴史文化博物館蔵『漢洋長崎居留図巻(蘭館図)』等に、出島で二人の異国人が羽根突き遊びをしている様子が描かれているからであろうか。

出島旧石倉裏には、元長崎県バドミントン協会会長 横尾秀夫氏建立(昭和54年)の「バドミントン伝来之地」碑がある。出島バドミントン長崎の結び付きと思いたいが、昭和初期「横浜YMCAの外国人さん達が遊びでバドミントンをやっていたのが、日本中に広まった。」との見方が一般的である。また、遊びとして使用されていたラケットとウーラング(羽根)が、蘭学者、森嶋中良著『紅毛雑話』に、掲載されているのは前記の長崎説に関係があるようである。

とにかく、長崎とバドミントンは縁が深い。日本バドミントン協会前理事中山紀子(旧姓高木)女史は、隔年毎開催の女子国別対抗団体戦(2複3単)、ユーバー杯第4回ウエリントン大会(昭和41年)から第6回東京大会(昭和47年)まで日本チームが3回連続優勝できたのは、「毎回、長崎で合宿をしたからです。」と昨年、話されていた。

上小)君が男子単3位だった。長崎県バドミントン協会強化部と指導普及部が小中学生のジュニア層強化に力を入れており、成果が現れてきているので今後が楽しみだ。その子供達が大きくなり、奥原選手のように世界を舞台に活躍できる選手が出現することを願っている。

今年、「第7回全国ねりん交流大会」を「シーハットおおむら」に於いて10月10日・11日長崎県バドミントン協会主催の大会として開催する。全国から60歳以上のバドミントン愛好者が集うので、旺盛なサービス精神をもって長崎の良さをアピールしたい。(長崎県バドミントン協会理事長)

風信

○昔は肥前の国(長崎) 肥後の国(熊本)と言い「同じ肥の国(兄弟県)だったそうです。その熊本県での大災害、何はさて置いても大いに援助すべきでありましょう。

○さて五月の候となり、四月末日より休みが続きましたので「春の海 ひねもす のたり」とできると思っていました

○四月二十九日は崇福寺媽祖祭。三日憲法を考える会。四日は県九條の会主催「第十回憲法さぐる(子供と歩く平和の道)」に参加し西坂街道を原爆被爆の樹がある山王神社まで歩きました。五日は節句。矢上滝の観音伝統「三百年の花祭り」に矢上より無料バスに乗り参加、かえりは、古賀植木市に案内をうけました。(この日の昼食は間ノ瀬婦人会の御接待にあずかりました。)いそがしい毎日でした。

○「長崎年中行事抄」には「五月と言えばペーロンの事」とあり文政年間(一八二〇)編纂の「長崎名勝図絵」には実に詳しく記してある。ペーロンは「剋龍」と書し南中国より来舶した唐船の人達によって伝えられたものであるとされている。ペーロンはあまりにも盛んとなり寛政十二年(一八〇〇)五月五日、本五島町の若者と鍋島藩深堀の若者とが死人がでるほどの喧嘩となり翌享和元年長崎奉行所よりペーロン禁止令が出されている。

○今月ご寄贈いただいた書籍

- 一、長崎歴史文化博物館より『研究紀要第16号』
- 一、シーボルト記念館より『鳴滝紀要第26号』
- 一、両書ともにすぐれた論考集でした。特に錦織先生の「黄葉僧独湛の絵画(歴史紀要)織田毅先生の「オランダ通詞研究」ともに新しい論考であり大いに参考になりました。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 二F

